

西郷は同じ志を持ち、斉彬の命で一橋慶喜將軍擁立運動に協力してくれた勤王僧月照を伴い、逃げるように鹿児島に戻っていった。

月照を匿ってもらうつもりであった。

しかし、藩の内情は斉彬の生前とは一変していた。

藩庁はこの時点での幕府との力関係を考え、西郷はともかく勤王で有名であり過ぎる月照を受け入る気は毛頭ない。

自藩への影響を考え、県境まで連れ出したところで斬れ(隠語で日向送りと言った)との内示が下がってしまう。

藩は、その首を幕府へ差し出す方針なのである。

人一倍責任感が強く、情の深い西郷はそれを見過ごすような上手はできない。

もう先はない、そう思いきると西郷の行動は早い。

彼は護送途中、煌々たる月明かりの錦海湾船上より、月照共々入水自殺を図ってしまうのであった。

辞世がある。

大君の為には何も惜しからん
さつまの瀬戸に身は沈むとも
(月照)

ふたつなき道にこの身を捨小舟
波立たばとて風吹かばとて
(隆盛)

このあたり「諦めの良い」西郷の顔がチラチラ見える。

良い言葉を使えば「潔い」とも言えるが、今いちピンとこない。

彼は生来、政治家としては執着心に足りないところがあったのではないか、

そして、禅の深耕がそれを助長した。

ピンチの時の大久保や長州の桂などの粘り腰に比べると、それが際だって見える。

そのところが彼の短所でもあるのだが、ある意味では魅力にもつながっている。